脳波経過を追うことができたリチウム中毒の 2 症例

◎佐々木 伸章[1)]、杉山 邦男[1)]、小林 真由美[1)]、東谷 剛志[1)]
東邦大学医療センター大森病院[1)]

【はじめに】炭酸リチウムは躁病及び躁うつ病の躁状態の治療薬として標準的に用いられているが、過剰投与によりリチウム中毒を発症することが知られている。初期症状は手の震えや吐き気、めまいなどを認め、重症化すると意識障害や全身けいれん、ミオクローヌスがみられる。重大な副作用の一つとして脳波の徐波化や PSD の出現が報告されている。今回、脳波経過を追うことができたリチウム中毒の 2 症例を報告する。

【症例①】40 代女性。他院からの紹介にて来院。双極性障害と診断され、炭酸リチウム 400mg/日を服用していた（服用期間不明）。1 年前よりうつ症状に伴い食事摂取量が低下し、1 ヵ月前より 1 日ご飯 1 口程度の食事を続けていた。来院時、行動把握できない様子がみられ歩行も不安定であった。採血において血清炭酸リチウム濃度が 1.94mEq/L と高値を示したため、リチウム中毒が疑われ入院加療となり脳波を施行した。

【症例②】50 代女性。双極性障害の治療目的で当院メンタルヘルスセンターに通院していた患者。他殺念慮による医療保護入院中に炭酸リチウム 400mg/日を開始し、9 日後には 800mg/日に増量した。炭酸リチウム治療開始 30 日後に JCSⅡ－10 と意識障害を認め、採血では血清炭酸リチウム濃度が 2.08mEq/L と高値を示したため、脳波を施行した。

【結果】症例①は血清炭酸リチウム濃度 1.94mEq/L 時の脳波で三相波を伴う徐波主体の脳波を認めた。血清炭酸リチウム濃度が 0.70mEq/L 時の脳波では三相波が消失、徐波は減少し、脳波の改善が認められた。症例②は血清炭酸リチウム濃度 2.22mEq/L 時の脳波で、全般性に出現する徐波主体の脳波を認めた。血清炭酸リチウム濃度が 0.33 mEq/L 時の脳波では徐波が減少し、脳波の改善が認められた。

【結語】2 症例のリチウム中毒患者の脳波を経過観察できた。リチウム中毒では徐波化や三相波、PSD の出現が報告されている。炭酸リチウムは有効量と中毒量が近く、血清炭酸リチウム濃度のモニタリングが重要であるが、血清炭酸リチウム濃度と意識障害の重症度とは相関しないため、脳波による経過観察が重要であると思われた。

連絡先 03-3762-4151　内線 3470